在家中生へのメッセージ

この春、１冊の本と出会いました。『電池が切れるまで』というタイトルの児童書です。そこに描かれているのは、長野県立こども病院の院内学級に通う子供たちの実話です。

命

宮越（みやこし） 由貴奈（ゆきな）

命はとても大切だ
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる
命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も
月日がたってやっと
神様から与えられるものだ
命がないと人間は生きられない
でも
「命なんかいらない。」
と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命がつかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから　私は命が疲れたと言うまで
せいいっぱい生きよう

この詩は、みやこしゆきなちゃんが小学四年生のときにかいた「命」です。ゆきなちゃんは、詩をかいてから四か月後になくなりました。

まだ十一歳でした。

こどものがんのなかで一番多いといわれている神経芽細胞腫という病気でした。

・・・・・・

「そうか！　電池はたいせつに使うとながもちするんだ。使えなくなったら、新しいのとこうかんすればいい。でも……」

ゆきなちゃんは、自分たちの命がまるで電池のようだと気づきました。

けれど、命の電池は、こうかんすることができません。

「自分の命も、友だちの命もだいじにしよう！　病気でもがんばろう！」

ゆきなちゃんは、このときの気もちをわすれませんでした。

そして、自分のかよっている学校の国語の時間に、「命」の詩をかいたのです。

「電池が切れるまで」　宮本雅史 作　角川つばさ文庫 より（一部 省略）

「命はとても大切だ」　私たち誰もがわかっていることです。しかし、ふとした瞬間、今、目の前にあるつらいできごとの方が命よりも大きく、重いことのように感じてしまう時があります。しかし、《 まだたくさん命がつかえる 》のです。あなたの命も、みんなの命も。

新年度を迎えるにあたり、不安もあると思います。自分の思っていた未来と違うこともあるでしょう。そんな時でも自分を、そしてまわりの人を大切にできる人であって欲しいと願っています。

４月１０日（月）　みなさんの明るい笑顔に会えることを楽しみにしています。

在家中学校　教職員一同